

ブジ・国際会議の報告

長田 俊樹

総合地球環境学研究所

2009年度の締めくくりに、インドのグジャラート州・ブジにおいて、2010年1月28日から三日間、国際会議が開催された。国際会議はブジ・ラウンドテーブルとして、ブジのホテルでおこなわれたが、その準備・運営はすべてインド側によって執り行われた。まず、冒頭に、その準備・運営を指揮してくれた、コアメンバーのカワクワルさんに、御礼のことばを述べておきたい。

今回はインド人研究者だけではなく、日本のプロジェクトメンバーや海外の研究者も参加された。その日本からの参加者を記しておこう。

地球研スタッフ：長田俊樹(リーダー)、大西正幸、森若葉(以上、上級プロジェクト研究員)、上杉彰紀、寺村裕史(以上、プロジェクト研究員)、遠藤仁、園田建(以上、プロジェクト研究支援員)、河村たみえ(事務補佐員)(敬称略)

コアメンバー：宇野隆夫(国際日本文化研究センター)、後藤敏文(東北大学)、前杵英明(広島大学)、斎藤成也(国立遺伝学研究所)

プロジェクトメンバー：松井健(東京大学)、木村李花子(馬事文化研究所)

プロジェクト協力者：神澤秀明(国立遺伝学研究所院生)、山田智輝(東北大学院生)

その他、海外からは、イタリアから Maurizio Tosi, Dennys Frensz そして、フィンランドから Asko Parpola、アメリカから Randall Law, Adam Green が参加した。

1月28日、午後から開会式がとりおこなわれた。開会式では、ブジにあるカッチ大学の学長をチーフゲストに迎え、インドの伝統的スタイルでおこなわれた。開会式の後、長田がインドス・プロジェクトの概要についての説明をおこなった。その後、次々と発表がおこなわれたが、実際のプログラムと発表タイトルは以下の通りである。

BHUI ROUND TABLE 2010

GUJARAT HARAPPANS AND RURAL CHALCOLITHIC CULTURES

28TH TO 31ST JANUARY, 2010

28th January, 10

Inaugural

Chairperson: Prof. M.K. Dhavalikar, Former Director, Deccan College, Pune.

Chief guest: Prof. Kanti Gor, Former Vice Chancellor, Pt. Shyam Krishna Verma Kachchh University, Bhuj

Toshiki Osada

Introduction of Indus Project.

M.G. Thakkar

Neotectonic Evolution and Quaternary Episodes in Kachchh.

M.K. Dhavalikar

Harappan Enterprise in Western India: new facets of an old Civilization.

Rajesh Sashidharan

Distribution of Harappan and Regional Bronze Age folks in Gujarat.

R.S. Bisht and Y.S. Rawat

The Harappans in Kachchh: In Retrospect and Prospects.

J.S. Kharakwal, Y.S. Rawat and Toshiki Osada

Kanmer Excavation.

Endo Hitoshi

Mature Harappan Lithic Assemblage at Farmana and Kanmer.

Charu Smita

Lithic industry of Bagasara, Gujarat.

29th January

Pankaj Goyal and P.P. Joglekar

Animal Utilization Patterns at Kanmer, Gujarat.

Anil Pokharia

Plant macro-remains from the Harappan settlement at Kanmer: A preliminary contemplation.

M.D. Kajale

Palaeoethnobotany of Harappan sites in Western India with Special Reference to Gujarat: Visiting old problems with fresh approaches.

Ambika Patel

Harappan Copper Artifacts from Bagasara, Gujarat: Cataloguing and Conservation.

Prabodh Shivalkar

Padri and Anarta Culture: A Rethinking.

V.S. Shinde

Harappan Culture in Saurashtra, Gujarat : A Regional Manifestation.

Ajithprasad P

The Pre-Prabhas Pottery and the Early Chalcolithic Cultural Developments in North Gujarat.

K.K. Bhan

Review of Prehistoric Pottery from Gujarat.

Akinori Uesugi

Ceramic styles in the pre-/Early Harappan period in India and Pakistan: a comparative study.

Randall Law

Harappan rock and mineral acquisition and use patterns in Gujarat.

30th January, 10

P.P. Joglekar and Pankaj Goyal

Animal Diversity at Harappan Sites in Gujarat.

Takao Uno and Hirofumi Teramura

3D Images of Seals and seal impressions from Kanmer.

Asko Parpola

Crocodile in the Indus Civilization and later South Asian tradition.

Vivek Dangi and Manmohan Kumar

Pre-Harappans(so called Hakra Culture) of Upper Ghaggar Basin.

Dennys Frenez and Maurizio Tosi

The "Lothal Revisitation Project". A Multidisciplinary Research Program designed to reconsider the South-easternmost Hub of the Indus Civilization on the Arabian Sea.

Kuldeep K. Bhan

Harappan Trade and Organization of Specialized Crafts in Gujarat, India.

Hansmukh Seth

Archaeological Explorations in South Rajasthan.

K.P. Singh

Water Management at Kanmer.

これらの発表原稿は現在カラクワルさんの手で集められ、インド・グジャラート州考古局のラワトさんが中心となって、インドで出版する計画である。

本国際会議の一番のメインは、実際の遺跡から出土された土器が持ち込まれ、土器を実際に手にとって、いろいろと議論がおこなわれたことである。というのも、土器の分布や編年、そして用語の統一などがこれまで十分に議論されることがなかったからである。インダス文明研究をはじめると、皆さん壁にぶつかるのが、研究者によってことなる年代と名称である。ハラッパー盛期 (Mature Harappan) といったり、都市期 (Urban Harappan) といったり、あるいはアジツトさんのようにハラッパー古典期 (Classical Harappan) と呼んだり、名称からしてなかなか統一できていない。もちろん、学術用語の統一などがこの会議でいつべんに解消できるはずもない。しかしながら、とにかく実態として、共通の認識を持つようとする今回の試みは大変重要な意義を持っていると、私は理解している。

最初の計画では、パキスタンの考古学者にも参加していただくよう模索したが、実現はむずかしく、途中であきらめてしまった。そういった日がいつか来ればいいと切望してやまない。

じつは、この国際会議では日本隊のほとんどの皆さんは二日目の会議に参加せず、別行動をとった。というのも、発表自体が考古学の専門に偏ったもので、考古学を専門としない方も多く参加されたので、ずっと国際会議で専門的な発表を聞きながら、じっと座っているのは大変だろうとの配慮であった。初日のみ会議に参加し、29日はわれわれが発掘したカーンメール遺跡と小カッチの中にある、カーネリアンの原石がとれる場所をおとずれた。こうした別行動を許してくださったカラクワルさんには、準備・運営のみならず、行き届いた配慮にただ感謝するばかりである。

また、会議の終わった31日には、グジャラート州最大のインダス文明遺跡、ドーラヴィーラー遺跡のツアーをおこなった。プロジェクトリーダーとしては、インダス・プロジェクト・メンバーでありながら、インダス文明遺跡をまったく見学することなく終わってしまうのでは申し訳ないと思いつねづね考えてきたが、今回、多くのプロジェクトメンバーが現地を訪れる機会を得られたことは望外の喜びである。とくに、後藤敏文さんはインド学の伝統に則ってインドにこれまで行くことがなかったのに、今回参加してくださったのはうれしい限りである。なお、後藤さんはじめ、斎藤さんと松井さんがこのときの感想文をお寄せくださり、ニュースレターに掲載したので、そちらもぜひご一読くだされば幸いである。

ただし、特記しておかなければならないのは、体調を壊した方（とくに下痢に襲われた方）が相当数いたことである。そのために、ドーラヴィーラー遺跡ツアーには参加できなかった方もおられたし、道中、体調を悪くされた方もおられた。インド経験が長いリーダーがもう少し食事や水に気をつけるべきだったと反省している。幸いにも、1月の末は一番涼しい時期だったので、死に至るような伝染病にかかる人は誰一人なかったのがせめてもの救いであった。